

幼児童話について

小川未明

何よりも、これは、小さな子供のために書くのだといふ、はつきりとした、心の持方が大切であります。なぜなれば、目標を定めないかぎり、そのお話には、ついに一つの中心點が見出されないからです。それは、作者の心の動搖を意味するものです。そのためには、対象となる子供達の年齢といふことが、重要な問題でなければなりません。

その年頃の子供達の特質や、生活といふものを親切に理解し認識して、はじめて自然な感銘を與ふる事が出来るのです。最も多感にして、空想的な四五歳頃の子供達について考へるいゝ例があります。その時代の子供達がお母さんから、お話をきかうとする時の有様はどんな風であらうか？

毎晩、日が暮れるご早くから床に入つて眠る子供は、

「お母さんでなければいや」とひひます。「いつも、お話ををして下さるからです。けれどお母さんは、まだ仕事が片附かないのです。兄さんか、お姉さんかに、寝かしておもらひなさいといはれても、子供はきしません。

「しゃうのない子ですね」。こつこつにお母さんは、負けてしまつて、子供をつれて行かれます。果して、子供は、

「お母さん、お話をしてもよ」と、いつものやうに、お話をきしながら、眠らうといふのです。

それを知つてゐるお母さんは、どうしても子供にお話をしなければならなくなる。そして、考へても新しいお話が、さうすぐに浮んで來ないので、またいつものお話をすることになります。

これまでお母さんの創作で、幾度もなくきいた、「兎と獵人」のお話は、殆んど暗誦してゐる位であるから、子供はまたかこいつで、喜ばないでかいふに決してさうでない。子供は却つてそのお話を對して、限りない親しみすら感じてゐるのです。

たゞ問題は、お話をそのものになくして、お母さんの態度であります。もしお母さんが、まだ仕事があるので、その方へ氣を取られて、肩にかけた襷をはずさざるなら、子供は、それに對して不平をいふでありませう。それから、いつものやうに、自分といつしょに横はるやうにさせがむにちがいない。恐らく、五分か、十分の後には、すやへて眠つてしまふのであるが、ゆづくらう、この話を味はうて考へるからです。義務的にきかしてもらふお話では、全く有難くないのです。子供は、話を介して、眞にお母さんといふものに觸れたいのです。それで、頭の中で、全く熟さない思想や、表現が、子供の頭に入りにくいのは、ちやうだいのやうなものです。であるから、先を急ぐために、お話をある部分を飛ばしたり、改めたりするやうなことがあれば、子供は、すぐ止みます。

「あゝ、ちがつてゐる、お母さん、忘れちやつたの」と、いひます。さうしたことが、いままでの子供の氣分を傷ふばかりでなく、甚だ調和を缺き、不自然に感じられたためです。
之に反して、もしお母さんが、ゆづりこした氣持で、いつものお話に、さらに尾鰭を附けて、面白く語らうものなら、子供は、ぎんに喜んだであります。

子供は、お母さんの話をきゝながら、ぎんなお爺さんで、ぎんな山の中で、ぎんな様子で、さまへんに想像してゐる
際であるから、お母さんの説明が、ぴつたり自分の想像に合したなら、ほんたうに目で見るやうな氣持がして、され程、
うれしく思ふかしません。そして、そのときは、お母さんの説明が、極めて自然であつたことになります。子供
は、年齢に相應した経験以外に空想を描き得ないから、子供に親切な説明は、即ち、子供をよく認識して、理解して、は

じめてなされるこゝになるのです。また、子供こゝしよに童話の世界に没するこゝにもなるのです。

徒らに筋を複雑にしたり、刺戟的にしたり、目新しい事柄こするこが、必ずしも子供を喜ばせるかといふに、決してさうでない。自然ならざるものは、子供の心を搔き亂すこはあつても、平和と公正の眞の喜びと判断を教ふるものとはならないのです。成べく、幼児に對するお話の筋は單純に、自然に、素直にして、明朗なものがいゝのであります。人間完成の意味からいつても、氣分の統一こいふこゝ、感情の純化こいふこゝが何より大切なこゝであつて、これが教化こしての、讀ませたり、聞かせたりするお話と關係するこゝが、極めて多いのであります。

平明にいへば、お話をする者の態度が、一番肝要になるのであります。先づ子供に、平和な安心な氣分を與へ、次に、子供と共にそのお話の世界に浸り、善美の方へ憧かれることです。このこゝは、お話をする場合にも、またお話を創作する場合にもいはれます。同情の眼をもつて、子供の姿を自分の前に、はつきりこ見るこゝ。たゞへ創作する時でも、文章を書くこいふ意識からでなく、子供に語るこいふ氣持を忘れずにするこゝ。そして、幼児に於ては、彼等は、お話の筋を面白がるこいふよりもむしろ、語る者から、深い愛を要求してゐるこゝを、たえず何等か人間的なものに觸れようとしてゐるこゝを、強く知らなくてはならぬのであります。

いつも、お宮の境内へやつて來る、顔馴染の紙芝居の小父さんなら、その小父さんが、たゞへぎんな話をしても子供は、面白がつてきくであらうし、お母さんや、先生が、またぎんなお話をなされても、子供達は、そのにこやかなお顔さへ見れば、半ば満足するのであります。だから、愛をもつて語られる話ならば、どんな話でも面白がつてきくにちがひありません。愛のあるこゝろ、正純な感情の染むこゝろ、いかなる不自然な材料も、自然化されるであらうし、また複雑なものでも、單純化されるであります。故に、幼児のお話は、詩的な童話の中でも特に詩の部類に屬すべきものです。(をはり)